芸術からスポーツへ
―美学の拡張の試み(注1)―

樋口　聡

序

これまで、スポーツは美学の重要なテーマであるとは見なされてこなかった。しかし、体操競技やフィギュアスケートにおける人間の美しい身体運動とか、マラソンやバスケットボールのゲームの劇的な展開とか、スポーツに美的次元があることは確かである。なぜこれまで美学者はスポーツを美学の主題として取り上げてこなかったのか。その理由の一つは、要するに、スポーツなどといったテーマが美学の伝統と合致しないからである。一般に、美学は主として芸術を考察の対象とすると考えられており、美学の一種独特の言説のスタイルが、芸術以外のテーマの問題化を暗黙のうちにも拒んでいる。

しかしながら、そのような美学の「伝統」には、いろいろな疑義が提示されている。あるいはまた、従来の芸術の概念で議論を進めることにも問題があることが指摘されている。例えば、アメリカの美学者ヨゼフ・カプファーは、美術館とかコンサートホールといった特権的な場所だけでなく、日常生活の中に美的価値を見いだすことを試みている。「われわれは、分析や理論、議論や討論が経験それ自体からそれて経験の知的な定式化だけに走ることのないように、哲学的な考察を日常世界へともどさなければならない」(注2)とカプファーは言う。また、リチャード・シュースターマンは、ポピュラー・アートの美学的な異議申し立てについて論じている。

「大衆文化に関する美学、およびそのような美学とわれわれの文化で正当化されている高級芸術（high art）との関係といった領域において、独創的で社会的に重要な理論的研究がまさに求められており、そこには大きな可能性がある。この領域を無視したり過小評価すれば、哲学的な美学は、研究の対象であると同時に変革を促すことも可能である文化的な世界との緊密な関わりを失うことにもなりかねない」(注3)。

本稿は、視点を芸術からスポーツへとずらすことによって、伝統的な

美学が見逃してきた問題のいくつかを指摘しようとするものである。その場合の「ずらし」の意味は、視線を単純に芸術からスポーツへと「移す」ことではない。もっぱら芸術にまなざしをそそぐというこれまでの美学のパターンをとりあえず棚上げにし、芸術を眺めつつも視野をその周辺部分にまで積極的に拡張してみようという運動に他ならない。視野が広がった分だけ、いろいろなものが見えてくるであろう。そのいろいろなものの一箇所に視線が止まることもあれば、漠然と全体を視野に入れ、視線は全く別のものに向かっているなどということもあろう。複数の事象の間を視線が往復することも、もちろん可能だ。

　われわれの視野には、いま芸術とスポーツが入っている。しかしながら、この発言は抽象的である。それらはどんな芸術とどんなスポーツなのかが言えなければ、それは視野と言うには現象からあまりに遊離している。それらの時空間も特定できなければなるまい。視野は当然のことながら一つの比喩であり、その視野を生み出しているのは思惟に他ならない。思惟は抽象であることは必然であり、われわれの目標は、芸術やスポーツを手がかりにして、実は抽象の果てにある。このことをわれわれはまずよく認識しておかなければならない。問題の所在は先のカプファーからの引用に確かに沿っている。しかし、われわれのなしうることは、まさに（積極的な意味での、あるいはカプファーに批判されないような意味での）「経験の知的な定式化」にすぎないことも確かであろう。

　考察の対象は拡張された。それに対処する方法は、とりあえずは従来の美学の方法を使うしかわれわれにはない。新たな方法が生まれるとすれば、それは、拡張された対象の考察のそれぞれにおいて発生してくるものであろう。まずは常套手段として、芸術とスポーツを比較してみよう（第一節）。何のために比較するのか。比較それ自体が眼目ではない。当然のことながら比較のための視点はわれわれの手中にあり、ここでなされることは、比較というまなざしによって見えてくるものをつかんでみることだ。その際、やはり気にかかるのが、全く安易に芸術を「高級な文化」と捉えようとする無意識裏に執拗な先入見である。そのような通俗的な精神にとっては、スポーツは低俗なえせ文化である。シュースターマンの問題の指摘にはわれわれのそれと通底するものがあるが、彼も言うように「大衆文化」なる枠を安易に設定して、それを救っていこうとするような発想は、同じ先入見の内にある。「文化」に対する意識の変革が必要であることは言うまでもない（第二節）。

　さらに、スポーツという事象へ視線をずらすことの特長的な意義は、やはりスポーツに内在している本質的な特性に規定されてくる。それが、一つは身体の問題（第三節）であり、もう一つは遊戯の問題（第四節）である。しかしながら、この身体論と遊戯論はいずれもそれだけで大きな問題である。そのような問題の存在とさらなる問題の広がりを指摘すること、それがさしあたっての本稿での課題である。

一　芸術とスポーツの比較

スポーツが美学的な考察の対象となりうることはすでに指摘されてお

り、その研究領域がスポーツ美学と呼ばれている。(注4) スポーツ美学にとっては、芸術とスポーツを比較するという視点を持つことが重要である。その際、スポーツは芸術か否かという問題が起こってくるが、この問題は、スポーツ美学の研究者によってすでに議論されている。ここでは、スペンサー・ワーツとデイヴィッド・ベストの論争とそれにコメントを与えているクリストファー・コードナーの論を簡単に取り上げよう。

スポーツを美学的に論じようとする研究者の中に、スポーツを芸術と見なしたがる人々がいる。彼らは、スポーツは一種の芸術だと言う。なぜだろうか。それは、もしスポーツが芸術と見なされれば、スポーツはすでに高い評価を得ている文化の仲間入りをすることになる、と彼らは考えるからである。ワーツはそのような論者の一人である。ワーツは言う。「例えば、ビヨルン・ボルグといった真に偉大な競技者がウィンブルドンでテニスの試合をするとき、………ジャーナリストたちはその試合は芸術的だと言う。………そのような試合は、テニスというゲームの何たるかを明らかにし、さらには重要な社会的・道徳的問題を表現することもあるのだ」(注5)。こういったスポーツ=芸術論者たちの見解には、スポーツへの熱い思い入れが感じられる。

このような立場を批判するのがイギリスの美学者デイヴィッド・ベストである。彼はスポーツは芸術ではないと言う。「スポーツは芸術ではないと言うことは、スポーツの価値を落とすことには少しもならない。逆に、スポーツを芸術の基準で判定すること（そのようなことは私は無意味だと思うのであるが、仮に意味があるとして）は、スポーツの価値を下げてしまうことになるだろう。スポーツは疑いなく、すぐれて美的なものたりうるのだ。どうして、美的基準を含んだスポーツに固有の基準でスポーツを判定しようとしないのか」(注6)。ワーツに対するベストの批判の一つのポイントは、芸術的なものと美的なものについての誤解にある。ベストによれば、

「美的なものという概念と芸術的なものという概念の間には、重要な違いがある。それゆえ、或る活動が本質的に美的であるということは、それが芸術であることを少しも意味しない。奇妙なことに、この区別は多くの美学者によって見失われている」(注7)。

筆者は、この論争については別の論文で詳しく論じたことがあり、そこにおいて筆者はワーツの論の不適切さを指摘した。(注8) 確かに、芸術とスポーツの間にはいくつかの類似点がある。例えば、両者とも日常性を超えた活動であるとか、両者に見られる体験の直接性であるとか、あるいは両者ともパフォーマンスを含んでいるとかなどである。しかし、われわれは両者の間にある違いに気づかなければならない。芸術は、或る観点からするとスポーツとは一線を画するものである。多くの美学者はこの見解に賛成するであろう。芸術とスポーツが同じものであるはずがない、というわけだ。非常にすぐれた芸術作品の美を観照しつつ忘我ないし恍惚の状態に入るときにこそ、最も純粋な美的体験の相があるのであって、スポーツの観戦などは、本能的感情の刺戟であって高等精神作用の

異常な阻止以外の何ものでもないとして、芸術とスポーツが同じものであるはずがない！と力説した美学者が、かつていた。(注9) また、スポーツの快楽に美的なものを見いだそうとするような試みは一種のヘドニズムなのであって、そこには芸術に見られるような「精神性」が欠如していると考える美学者は多いに違いない。これらの言説は確かに問題の一面を指摘するものではある。しかし、高等な精神性と語ってしまう美学者の態度にはスノビズムに近いものを感じざるをえないし、芸術に対する彼らの憧れが素朴なものであるとすれば、そこには、先に取り上げられたワーツらのスポーツに対する熱い思いと同質のものを見いださないわけにはいかない。

いずれにしても、スポーツは芸術ではないという見解は美学において圧倒的に支持されるとして、翻って、ベストによって指摘された、美的なものという概念と芸術的なものという概念の差異についてはどうであろうか。たちまち曖昧になってしまうのではないだろうか。多くの場合、美的なものという概念と芸術的なものという概念は、暗黙のうちにも等値に互換されて使われているように思われる。そのような事情の背後には、例えば、「芸術美は精神から生まれたものであるから、自然美より高級なものである」(注10)として美学の対象を芸術美に積極的に限定するヘーゲルの思想があるなどと言えるかもしれない。

もし、われわれが暗黙のうちにも、以上のような見解を認めてしまうとすれば、われわれはどのような事態に直面することになるだろうか。美学は芸術についての学であるとして、高級な芸術を憧れ、追い求め、芸術の高級性の破綻とともに美学は萎縮する運命にあるのか。あるいは、従来の芸術概念にはこだわらないが、美学と芸術のかたい絆を断ち切ることはできず、新たな芸術概念を創出していくことになるのか。それは妥当かもしれない。しかし、その場合も、容易に予想されることは、意思表明とは裏腹に従来の（そして通俗的な）芸術概念から脱却することはできず、いわゆる芸術以外の美には目もくれることができない状況である。いわゆる芸術以外の美などというものを仮にわれわれが知ってしまったとしても、それは美学で言う「美」ではない、われわれの業界が扱う商品ではないというわけだ。スポーツの美などというものも、その類の代物であろう。もう少し建設的な見解を取って、美学がいわゆる芸術以外のものに目を向けることができたとしても、芸術概念に理由もなくこだわり続けるならば、それは、スポーツを芸術の中に含めようと企んだワーツらの浅慮と大差ないことになってしまう。スポーツをも含んでしまう特殊な芸術概念の捏造である。

このような八方塞がりにも似た状況を考えると、やはり、美的なものは芸術的なものと同じものと考えられるべきではなく、したがって美学は芸術の考察に限定されるべきではないとしなければならない。この見解にも、多くの美学者は肯定的な措辞を呈するかもしれない。しかし、大多数の美学者は芸術の牙城を守り続けるであろう。芸術以外の美学的問題？、そのようなものは私の関するところではない、と。それはそれでよい。しかし、芸術という実践が現実的に破綻やら終焉やらを迎えているとすれば、多くの学者が芸術という幻影にしがみついている美学と

いう学問はいったい何なのか、と人が思うとしても不思議ではない。誤解を避けるために言っておきたいが、筆者は芸術は終焉を迎えているとも思わないし、芸術の問題はまだまだ、否、人間が存在する以上、永遠に豊かなものを内包していると考えている。問題は、芸術について論じるわれわれのスタイルにあるのだ。芸術以外の対象に対しても、どれほど美学的に語りうるか、それがいま美学者には問われるべきなのではないか。

　さて、ベストによれば、芸術とスポーツの間の本質的な差異は、道徳的・社会的・政治的な問題といった人生の問題についての見解の表現の可能性の有無である。「スポーツの競技者は、いろいろな規則の中で、人生の問題についての見解を表現することなどはできないのであり、そのような可能性はいかなるスポーツ、たとえ［フィギュアスケートなどの］美的な種類のスポーツにとっても本質的なものではないのだ。例えば、体操競技の選手が、規定演技の中に戦争や人種差別についての態度表明をする運動を含めるなどということは、考え難い」(注11)。コードナーがこの論点に対してコメントを与えている。コードナーは、芸術作品は、人生の問題についての見解を表現するというよりも、人生の価値、すなわち最も深い意味や価値を現示したり実現したりするものだと言う(注12)。確かに、芸術作品において表現されるものは、人生の問題についての見解だけでなく、そのようなより深い意味や価値を含むべきであろう。

　いずれにしても、この点に芸術とスポーツの決定的な違いがある。たとえ抽象主義の芸術といえども、芸術であるからには何かを表現しようとする。もちろん、それはことばによって語られた人生の問題についての見解ではないかもしれない。ショッピング・カートのような通常の芸術的なコンテクストからは奇抜なものをしかるべき場所に置いて、「これは芸術作品だ！」と宣言する芸術家は、人生の問題について何かを語ろうとしているのではないであろう。しかし、その芸術家は、何らかのメッセージと考えられるような何ものかを提示しようとしてはいるのである。芸術家はそのような広い意味での表現に携わる人である。芸術の概念は、昨今のポストモダニズムの風潮の中で終焉の危機に瀕しているなどと言われることがあるが、しかし、ここに見たように、スポーツとの比較のもとで芸術概念を反省してみれば、そこには相変わらず一貫した共通の特性が見いだせるのである。もしダンスが体操競技やフィギュアスケートのようになってしまうとすれば、そのときこそが芸術概念の終焉であろう。

二　伝統的な文化概念を超えて

　前節において示したように、スポーツを一つの芸術形式だと見なそうとする人々は、そうすることによってスポーツを芸術のような価値ある文化とすることができると考えるのであった。そのような考え方は不適切であるのであるが、そこには、例えばジョン・トンプソンによる文化概念史の記述において理解されるような伝統的な文化概念が潜んでいるように思われる。トンプソンは、文化についての古典的見解を次のよう

に示す。

「十八世紀の終わりから十九世紀のはじめにかけて現れた文化概念は、それはまずドイツの哲学者や歴史家によって表明されたものであるが、『古典的見解』と言うことができるだろう。この見解はおおよそ次のように規定されうる。すなわち、文化とは人間の能力を啓発し高貴なものへと高める過程である。その過程は、学問や芸術の理解・獲得によって促進され、現代の進歩的な性格と結びついている」(注13)。

この種の伝統的な文化概念に従えば、スポーツなどは文化の中に含めるわけにはいかないと考える人々もあるかもしれない。しかし、それにしても、多義的な文化概念の分類の試みなどを少し参照するだけで、このような「古典的見解」が狭小なものであることは明らかになる。例えば、多義的な文化概念を系列化し、二様の文化概念に要約できるという指摘(注14)を見てみよう。すなわち、(A)「ドイツの文化史・文化形態学・文化社会学・文化哲学」的文化概念と、(B)「イギリスの社会人類学・アメリカの文化人類学」的文化概念の二系列であり、前者は、価値とか理想とか最も抽象化されたかつ普遍的なレベルでの文化概念、人間の最高度の精神活動の所産としての文化概念であり、後者は、人間が後天的に獲得しかつ学習によって後の世代に継承しうる、動物と区別されうる人間活動の全てという意味での文化概念である、という。「古典的見解」は(A)の系列に属する。トンプソンの指摘をまつまでもなく、現代の人類学的な、構造主義的な、あるいは記号論的な文化概念の批判的検討は、上述の(B)の理解のしかたを常識化しているであろう。「古典的見解」は、文化という語の日常的な(大衆的な)用法に暗黙のかたちで残っているとトンプソンは言う。皮肉なことにも、「高級な」精神的産物である芸術を論じる美学者が、気づかないうちに文化概念の理解においては大衆化してしまってはいないのか。

このような見解は、精神と身体を単純に二分し、精神は身体よりも重要であるなどと考える素朴な二分法的心身観と関係があるであろう。スポーツなどという身体的活動は、学問とか芸術といった高貴な文化と同じように考えるわけにはいかないというわけだ。もちろん、われわれは、そのような二分法を受け入れるわけにはいかず、トンプソンが批判するように、右のような文化概念の素朴な理解で満足するわけにはいかない。啓蒙主義的な進歩の観念と結びついた「高級な」価値の教化からは、ひとまずわれわれは解放されるべきである。

ここではスポーツと文化をめぐる新たな考え方の一例を提示してみよう。それは、文化の根源的な契機である「言語」の観点からスポーツを眺める見方である。興味深いことに、スポーツと言語の間にはきわめて類似した構造を見いだすことができる。すなわち、ソシュールやバルトによって指摘され理論化された、ランガージュ—ラング—パロールという構造である。ソシュール研究から独特の文化論を展開している丸山によれば、シーニュとしての言語の分節の尺度は、その基盤を言語外現実の中には(たとえ潜在的にも)一切有しておらず、その恣意性こそが

自然と文化をへだてる唯一の特質である。(注15) このような文化へのまなざしは、きわめて広範なパースペクティヴを有している。そして、ラングーラングーパロールといった構造は、言語に限らず、あらゆる文化的な事象に見いだせるものであるから、それを、人為的な産物であるスポーツに当てはめてみることができることなどは、至極当然のことなのかもしれない。つまり、スポーツと言語が類似しているというのは必ずしも正確ではなく、むしろ、言語の根底にある文化の構造の理解がスポーツにも適用可能であると言うべきであろう。本稿での問題の関心も、基本的にはその点に集約される。

われわれは、「スポーツ」ということばを日常生活では何の疑問も持つことなく使っている。しかし、少し深く現実をふりかえってみれば、「スポーツ」などというモノは存在しないことに気づく。存在するのは、野球、バスケットボール、フットボール、水泳、陸上競技などなどの、多種多様なゲームである。スポーツそれ自体などというものは、ない。スポーツとは、すべての運動競技やその他の身体的活動の総称としての一つの概念にすぎない。この状況は言語にとっても同様である。言語においても、言語それ自体などというものは存在せず、存在するのは、英語、スペイン語、フランス語、ドイツ語、日本語などの個々の言語である。スポーツも言語も、「ランガージュ」という人間のシンボル化能力によって世界へともたらされたと言うことができるであろう。

われわれは英語と日本語を取り違えることはない。なぜならば、それぞれが独自の語彙、文法、表現方法などを有している、すなわちそれぞれの言語がその言語独自の構造を有しているからである。スポーツについても同様に考えることができるであろう。どのスポーツもそれぞれ独自のルールによって構成された独自の構造を持っており、われわれはテニスとバドミントンを混同してしまうことなどないのである。日本語の文法で英語を話すことなどできないのと同様に、フットボールのルールでもって野球をプレイすることはできない。そのような固有な構造は一つの制度であり、それは「ラング」と見なされうるであろう。話すとか書くという具体的な現象は、言語の「パロール」の位相である。スポーツと呼ばれるものが現出するのは、それがプレイされるときである。そのような現出はさまざまな形式を取る。この現実化が、スポーツにおける「パロール」と見なされる。

このような視点からすれば、スポーツは言語と同じ構造を有していると言えるのではないか。（ただし構造概念の多様な用法には注意しなければならない。）現在、われわれが通常スポーツと読んでいるものは、制度としてのラングである。百メートル競走などという、一見動物の走運動の延長上にあるかのように思われる単純なスポーツも、制度としてあるのであって、動物は、楽しそうに野山を駆けめぐることはあっても、一定の距離を、しかも一定の幅を持った直線上をできるだけ速く走ることを競うなどという意味を内在化させている「陸上競技」などをやることはない。それは、スポーツとは、動物には決してなしえない、人間のみがなしうる人間的な活動、過剰としての文化であることを意味する。スポーツとは、たいていの場合運動競技を指すのであるが、人間の特定

の身体的能力が発揮される遊戯的な活動なのである。それは、人間の遊戯性と身体性という本質的な特性に関与している。そこに見られる特性は、スポーツに固有のものである。すなわち、水泳という体験は、われわれ自身が水の中を泳ぐということによってしか体験されることはない。スポーツは、ルールによって構成された競争を含んだ或る種の意味連関の上に成り立っている複合体である。

この本質的な構造を考慮すれば、〈遊戯性〉〈ルールによる構成〉〈競争〉そして〈身体性〉といったスポーツの基本的な特性は、哲学あるいは美学のテーマとなりうるであろう。具体的な、現実的なスポーツの実践が哲学あるいは美学のテーマとなるというよりも、ここに抽象化された本質的な特性が哲学的・美学的省察を誘うのである。ソシュールが用いるチェスの比喩から指摘される、内的言語学と外的言語学の区別、形相（フォルム）と実質（シュプスタンス）の対立、体系内の差異の対立化から生ずる価値の概念、そして通時態と共時態の対立(注16)、などの理解は、スポーツというゲームについて語ることとまさに重なるではないか。また、競争なる人間の共同存在の様態は、スポーツのみならず、むしろわれわれの現実的な生、社会の問題ではないか。そして、さらに、遊戯性と身体性の問題が美学と深く関わってくる。まず、身体性について見てみよう。

三　身体の復権　―運動感覚（キネステティック）の美学（エステティックス）―

われわれは、自分でスポーツをするとき、われわれ自身の身体運動に取り込まれている。例えば、水泳をするときのことを考えてみよう。われわれは水の中で自分の腕や脚を動かし、規則的に呼吸運動をし、泳ぎ続ける努力をする。われわれは、自分の体にまとわりつく水の冷たさ、自分の腕や脚の重さ、あるいは逆に腕や脚の運動の快適さ、水中での呼吸の難しさ、心身の爽快感などを感じるであろう。このような体験は運動感覚的な体験と呼ばれており、右の例の場合は水泳運動に固有な体験である。このような体験は、われわれが自ら水の中を泳ぐということ以外には味わうことはできない。

言うまでもなく、運動感覚的な体験においては、身体は精神と絡み合っている。というのは、人間の身体は機械のような純粋身体＝物体ではないからである。人間の身体は生きた身体である。スポーツは人間の身体的な体験が生起する一つの典型的な場であり、スポーツにまなざしを向けることは、伝統的な哲学とは違った観点からの心身問題の哲学的考察を可能とするのではないだろうか。そのことは、「硬直したデカルト主義のモデルを払拭することは、存在論の拡張へと道を開くことになる」(注17)といったことへの貢献へと通じるかもしれない。

美学的観点からすれば、スポーツにおける身体的な運動感覚的な体験は、一種の美的体験と見なすことが可能である。このことは、すでに何人かの美学者によって指摘されている。ピーター・アーノルドは、批判

的に次のように述べる。

「運動感覚的（kine－aesthetic＝運動－感性的・美的）という語に含まれている語源的な意味にも関わらず、運動感覚的な感覚が美的体験をもたらす一種の知覚であるということが、これまでの美学においてほとんど論じられていないのは、奇妙なことである。おそらく、……それは、他の感覚的な知覚の形式と異なって、［運動感覚的な知覚には］対処しうる外的な『対象』が存在していないせいであろう。例えば『芸術という対象』というような、誰もが認知可能な知覚の対象が存在しないために、運動感覚的な知覚は『客観的に』議論されえないのである」(注18)。

しかしながら、問題は確かに残っている。スポーツなどにおける身体運動の体験を運動感覚的な感性的体験と言うことは妥当であるとしても、それが果して美的と言えるのかどうか。それはどのようにして判定されるのだろう。論理的に言えば、美的ということの条件なり基準なりが明確に規定されていなければ、そのものが美的かどうかという設問には答えることはできない。そのような条件や基準はあるのだろうか。「ある」という回答が予想されなくもないが、その「美的」の背後には「芸術」がありはしないか。もしそうだとすると、問題は第一節の美的と芸術的の区別に帰着してしまう。あるいは、そこには、美学は感性的認識の学であるというバウムガルテンの規定に漂う美学の「下級性」を否定しようという美学の伝統的な雰囲気がありはしないか。

さて、運動感覚的といったことを考えるには、運動する主体、実践者の体験という観点が必要である。日常生活において、本を読むとき、食事をするとき、何かについて話をするとき、バス停まで歩くとき、身体は確かに意識の中にない。身体は意識の表面に立ち現れてくることはないのだ。しかし、われわれがスポーツのプレイヤーになるとき、身体は体験の中心へと現出する。それは、身体を意識するということを必ずしも意味しない。自分の身体を物理的な物体のように感じてしまうのは、もっぱら未熟練のプレイヤーなのである。下手な泳ぎ手にとっては、自分の腕や脚はどこにでも転がっている丸太のようなモノ的存在になってしまうが、巧みなスイマーにとっては、泳ぐという運動感覚的な体験の中で遭遇する特殊な世界を現出せしめる魔法の道具となる。いかにして、スイマーはそのような体験の中に取り込まれるのだろうか。思惟によってであろうか。それとも瞑想によってであろうか。否。まさに泳ぐという運動によってである。

スポーツをプレイする際、実践者は自らの身体的な感覚を感じている。いわば、身体が身体を感じるのだ。そこでは、身体の二重性、両義性が生起している。そのような状況を分節化してみると、実践者は「主観－身体」と「客観－身体」を持っていると考えることができるであろう。前者は、いわゆる精神と関係している。後者が自然界、例えば水泳の場合は水で満たされた自然界と連続している。日常生活において身体が意識に上ってこないとき、身体の二重性は生起していない。それに対して、

スポーツ実践者は身体運動の中において身体の両義的な分裂を体験する。そして、主観―身体と客観―身体の間に、運動感覚的な体験は生じるのである。

客観―身体は、自然法則のもとにある自然界とのつながりの中にある。それは自然の一部であり、したがって身体は人間の意思を超えた、カントの用語で「自然の技巧」と呼ばれうるような、一種の規則性をそなえている。このような運動感覚的な体験について、われわれは、精神、主観―身体、客観―身体、自然の間にある連関をめぐり、一種の存在論的な考察を展開することも可能であろう。それは、人間存在と自然の秩序のダイナミックな関係として理解されるかもしれない。そのような（実存と実体の）中間的な性格は、例えばオスカー・ベッカーによれば、まさに人間的であり美的である。[注19]

以上のような運動感覚的な体験としての美的体験のためには技術と熟練が求められる。もちろん、実践者は運動感覚的な体験のメカニズムを知るわけではない。実践者は、もっぱら、練習において自分の技能の向上に努力するだけである。そして、その練習がうまくいったのかどうかを実践者が知るのは、運動の楽しさを発見するということによってのみである。実践者はプレイすることを楽しむ。その実践者の楽しさは、基本的には運動感覚的な体験としての美的体験に依拠している。

ここで提示された考察は、スポーツ実践者の体験に最も典型的に妥当するであろう。しかし、また、それは音楽の演奏やダンスなどの芸術的なパフォーマンスにも適用可能であるに違いない。それは、実践者の体験における身体の役割についての考察だけでなく、同時に、芸術観照における身体の意義の再考察のためにも、鍵を与えることになるであろう。

ついでながら、身体の復権をめぐる思想史的な問題の所在の指摘の一例を参照しておこう。

「それ自体世界を超越した形而上学的存在である精神ないし理性の存在とともに、その精神なり理性なりによって洞察されると信じられてきた形而上学的な背後世界（ヒンターヴェルト）の存在をも否定し去り、それこそ世界のただなかに〈身〉を置く身体に開かれる世界、これまでは真に存在する背後世界に対して仮象の世界、現象界として貶められてきた感覚的経験の世界に踏みとどまろうとする決意、認識を真理の把握としてではなく、生物学的機能としてとらえようとする見方、こうしたあくまでダイナミックな生の立場からする存在論……を、彼ら［ニーチェ、ベルクソン、マッハ］のもとに認めることができるように思う」。[注20]

このような立場が唯一のものであるとは思われないが、われわれの問題意識の一部を共有するものではある。その場合、精神に対する身体の復権といった二元論的な図式を安易に前提にしてしまうのではなく、むしろ問題は、精神における身体の復権あるいは身体における精神の復権であることを確認しておこう。

四　遊戯論の意義

スポーツと芸術の本質に関するもう一つの重要な問題は、遊戯の問題である。多くの哲学者が、人間存在の基盤について語るために、意識的にあるいは無意識に、遊戯の概念を用いている。例えば、美学的な観点からは、フリードリッヒ・シラーの論が有名である。シラーによれば、遊戯とは「主観的にも客観的にも偶然的でなく、しかし外的にも内的にも強制することのないもの」(注21)である。そのような形而上学的な意味において、「人間はことばの完全な意味で人間であるときにのみ遊戯するのであり、遊戯するときにのみ完全に人間なのである」のであり、そして「人間は美と遊戯するだけであるべきであり、美とだけ遊戯すべきである」(注22)と言われるのである。

シラーの論述のこの部分はよく知られており、このシラーの論に関連して芸術やスポーツは遊戯と見なされるかもしれないが、しかし、われわれはシラーの遊戯概念にはきわめて慎重にならなければならない。というのは、シラーは遊戯という語でもって「単なる遊戯」を意味してはいないからである。遊戯という語でもって、われわれは、子どもの遊び、娯楽、レジャー、スポーツ活動などといったものを安易に思い浮かべてしまう。しかし、シラーの遊戯概念はそのようなものを全然意味していないことは明らかであり、シラーが遊戯について語るとき、その論述は遊戯という語の用語法について曖昧さを残しているけれども(注23)、それは人間存在の理想についての論究を意味しているのである。

ところで、遊戯という語の用語法の曖昧さは、オイゲン・フィンクとかヨハン・ホイジンガといった思想家にも見られる。われわれは、用語法の曖昧さあるいは混乱を避けるために、二種の遊戯概念の明確な区別を立てなければならない。すなわち、存在論的な原理としての遊戯と現象的な活動形態としての遊戯の区別である。まずは両者の論理的な区別が立てられるべきであり、その後両者の関係が考察されなければならない。もちろん、哲学者たちの主要な関心は前者、すなわち一種の存在論的な原理あるいは意味としての遊戯にある。しかし、それはまた、後者、すなわち日常生活において通常遊びと呼ばれている具体的な活動と何らかの関係を持っているがゆえに、哲学者たちはいわゆる遊びに不用意にも言及してしまうのであろう。

遊戯の存在論的な概念を現象的な遊戯活動から区別することができるとすれば、遊戯の概念は、おそらく哲学や美学の重要な概念となるであろう。すでにわが国でも美学者が遊戯に言及しているではないか。遊戯を、現実にあらわれる行動や現象につけられた名称としてではなく、人間の行動の中に存する原理としてとらえなければならないという指摘は、われわれの問題意識と一致する。しかしながら、そのように正しく指摘する論者が同時に、現代においてはスポーツは「もはや遊戯ではない。しかし同時に芸術でもないであろう。なぜなら芸術のあたえるべき深い精神的感動が欠けているからである」(注24)と語ってしまうのを目にするとき、遊戯と芸術とスポーツの問題はさらに検討されなければならないことを実感しなければならない。また、別の美学者が「人間の遊びとは、人間

存在の基本様態のひとつであり、世界に対する基本関係のひとつであり、また、現実経験の基本様式のひとつである。それでは、あのアイオーンの遊び、神々の遊び、世界の遊び、存在の遊びは、どうだろうか。われわれが、遊びの現象学にふみとどまるあいだは、このはるかに目のくらむ問いについては、しばし沈黙することにしよう」[注25]と語るときの沈黙の果てに、われわれのまなざしは向いていると言えるかもしれない。

いずれにしても、われわれの問題はシラーへと遡ることになるし、そしてさらにカントにまで帰ることになるであろう。カントは遊戯について直接論じているわけではないが、しかし、彼は著作の多くの箇所で遊戯（Spiel）という語を使っている。カントによって使われた遊戯という語は、決して子どもの遊戯やスポーツを意味するものではないが、カントが使った語は確かに遊戯であり、彼は人間存在について論を展開する際に遊戯という考え方を必要としたのであった。カントの「美的判断力批判」において遊戯の概念がいかに支配的であったかを明らかにする試みは、すでに着手されている。[注26]

われわれは、同じ様な見方を、ニーチェ、ウィトゲンシュタイン、ハイデガー、ガーダマー、フィンク、そしてホイジンガに対して取ることができるであろう。ウィトゲンシュタインの言語ゲーム（Sprachspiel）はゲームと呼ばれているけれども、それは野球のゲームのようなゲームを意味するのではない。しかし、これら二種のゲームの間には或る種の意味の広がりがあると思われる。遊戯は確かに何ほどかの意味を持っている。遊戯は、あたかも関係のカテゴリーにおけるような何らかの意味であるかもしれない。もしそうであるならば、ホイジンガが戦争さえも遊戯のカテゴリーにおいて考察したように、多くのものごとにあるいはすべての事象に対してカテゴリーとしての遊戯は適用可能になるであろう。

それでは、遊戯の意味とはなにか。本稿においてわれわれは、この問題を回避して先送りにしなければならない。改めて周到に論じられるべき大きな問題だからである。そうは言っても二、三の断片的な手がかりは指摘できる。例えば、遊戯は非日常的で偶然的なものであり、「過剰」を意味する。遊戯は内的な因果性、内在的な目的を持った世界の中の「世界」である。遊戯は「中間」の性格を持ち、遊戯の存在論的地位は、存在論的両義性である。[注27]遊戯とは或る種の隔たり、ずれ、あるいは差異を生み出すことを意味する。差異の産出?このようなアイディアに出会うと、われわれは、ジャック・デリダのことを思い出す。デリダは言う。「痕跡の現前=不在は、これは両義性と呼ばれるべきでさえなく、遊戯と呼ばれるべきであろう（なぜなら『両義性』なる語はそれが現前の論理に反抗しはじめる時でさえこの論理を要請するのだから）、文字と精神、身体と魂の問題を、またわれわれがそれらとの最初の近親性を指摘したあらゆる問題を、自身のうちに蔵している」[注28]。デリダにとってもまた、遊戯の概念は鍵概念であろう。ここでは、遊戯の概念の観点からデリダを読むことが可能であるということを指摘するにとどまらなければならない。

要するに、プラトンからデリダに至るまでの哲学あるいは美学の歴史

を、遊戯という観点から読み直してみることが可能なのではあるまいか。それは興味深いテーマである。そのような考察の位相においては、われわれはもはや具体的な活動としての遊戯について語ることはないであろう。一種の存在論的な原理としての遊戯に関われば、芸術は遊戯か否か、スポーツは遊戯か否かなどという問いは無意味である。われわれは、そのような問いを生んでしまう先入見から論理的に解放されなければならない。ハイデマンの言うように、「美学の問題設定は遊戯そのものにあるのではなく、美的なものの基本的カテゴリーという意味を持ち遊戯において美を基礎づけしめる、遊戯概念にある」(注29)のだ。そうすると、これら二種類の遊戯の関係はいかようになるのか。それもまた大きな問題である。いくらか示唆するとすれば、芸術とかスポーツといった活動領域を、人間が存在論的な原理としての遊戯に出会い、その体験に取り込まれる典型的な場所として理解することができるだろう。

結語

本稿においては、具体的にはスポーツが考察の焦点であった。しかし、その関心はスポーツそれ自身にあるのではなく、美学の拡張の試みにある。それは、従来の美学の伝統を、或る意味において超えようとすることである。その超え方にはさまざまな方法があるであろう。本稿での問題の指摘はその一つの可能性であるにすぎない。それは、考察の視点を芸術からスポーツへと「ずらす」ことであった。それは、スポーツとの比較のもとで芸術を再考察することも意味している。

二つの主要な問題が指摘された。すなわち、身体の問題と遊戯の問題である。これらの問題はいずれも哲学あるいは美学そのものの問題たりうることが示唆された。本稿では、問題の素描のもと、いくつかのポイントが示されたにすぎない。しかし、美学の拡張のために何らかの方向は提示されたであろう。その妥当性は、例えば芸術と身体、芸術と遊戯、あるいは芸術とスポーツなどといったテーマの実際の考察の展開においてはじめて検証される。

しかしながら、それにしても美学という学問は「拡張」などされる必要があるのだろうか。本稿の試みの背後にはそのような戸惑いが確かにあり、また、スポーツという対象を一つの手がかりとすることの意図の中には、スポーツという事象を「救おう」とすることも確かに含まれている。しかし筆者の目標の先にあるのは、そのような狭小な企みではない。仮にそのようなことであったとすれば、本稿のような試みは、筆者が多少なりとも疑義を抱かざるをえない、芸術を何としてでも「救おう」とする人々のそれと、それほど変わらないものとなってしまう。もちろん、学問は、基本的にはどのようなものをも対象にすることができ、どのような内容を論じてもかまわない。美術史が美術を対象とし、音楽学が音楽を対象とすることを止めれば、それは自己矛盾であろう。しかし、美学という学問をいま改めて反省してみようとするとき、われわれは、美学という学問が「芸術」について語ることが当然であるかのような素振りを、敢えて止めてみるべきなのではないか。

今日の現代社会においては、ものごとの境界線はますます不明瞭で曖昧になりつつある。芸術の概念も例外ではない。このような状況を受け入れ、理解し、それに何らかのアプローチをすることができるかどうかは、われわれの想像力にかかっている。本稿におけるような、これまでの美学の常識からすれば奇異な対象に対して美学的な考察を展開してみることは、われわれの柔軟で創造的な想像力を試す一つの機会となるのではないか。美学という学問が、芸術とかスポーツといった現実的な事象をめぐるわれわれの具体的な体験を直接的に問題化できる位置にあることは、やはり幸いなことであろう。そのような利点を生かすためにも、美学は、モダンだとかポストモダンだとかいった観念が闊歩して錯綜しているいまのような時代においてこそ、かような知のダイナミズムの中にあるべきであろう。

注

注1　本稿は、一九九二年九月にスペインのマドリードで開かれた国際美学会での英語での発表論文 "From Art toward Sport : An Extension of the Aesthetics" の日本語版である。英語の原文を日本語に翻訳し、それにかなりの加筆をしている。この論文が発表された分科会には少人数の出席者しかなかったが、その中で数人の研究者が関心と質問を寄せてくれた。この論文の日本語版を発表するにあたり、そのときの事情を若干記しておきたい。

本論文にまず関心を示してくれたのは、カナダの Victor Yelverton Haines 氏である。彼自身、「遊戯（play）」の概念に関心があり、スポーツを観戦する現代的なスタイルが新たな広い意味での芸術的享受になるのではないか、といった点を質問していた。また、英語での play と game という分節に対して、日本語では遊戯、遊び、プレイ、ゲームというような語感を生かした多様な分節の可能性があることにも関心を示した。次に質問してくれたのが、ギリシアの Vassilis Gahiatsas 氏である。彼は、建築と哲学（解釈学）を学び、やはり遊戯概念に興味があるとのことで、本論文において指摘された存在論的な原理としての遊戯概念に共感を示した。また、チェコスロバキア（当時）の Helena Lorenz 女史も本論文に関心を寄せ、彼女から本論文をチェコスロバキアの言語に翻訳したいとの申し出を受けた。

なお、本論文（英語）は加筆されて、日本の美学会が発行している国際版『美学』に掲載されることになっている。

注2　Kupfer, J. H. *Experience as Art : Aesthetics in Everyday Life*, Albany : State University of New York Press, 1983, p. 2.

注3　Shusterman, R. "Form and Funk : The Aesthetic Challenge of Popular Art," *British Journal of Aesthetics*, 31(3), 1991, p. 211.

注4　拙著『スポーツの美学』不昧堂、一九八七年、参照。また、拙著 "Liveliness and Personality : The Content of the Aesthetic

Object in Sport," in : Andre, J. and James, D. N. (Eds.) *Rethinking College Athletics*, Philadelphia : Temple University Press, 1991, pp. 103−108. も参照。

注5　Wertz, S. K. "Representation and Expression in Sport and Art," *Journal of the Philosophy of Sport*, vol. 12, 1985, p. 12.

注6　Best, D. "Sport is Not Art," *Journal of the Philosophy of Sport*, vol. 12, 1985, p. 39.

注7　Best, D. "Art and Sport," *Journal of Aesthetic Education*, vol. 14, 1980, p. 77. なお、aesthetic と artistic の違いと両者の区別の必要性については、先述の国際美学会においてお会いした Bohdan Dziemidok 氏が全く同じように強調していたことを付記しておきたい。

注8　拙著「スポーツは芸術か？―ワーツ―ベスト論争―」『体育・スポーツ哲学研究』第十一巻第一号、一九八九年、二七―三九頁。

注9　大西克禮『美学（上）』弘文堂、初版一九五九年、十二版一九七三年、二七五―二七六頁。

注10　Hegel, G. W. F. *Vorlesungen über die Ästhetik*, Theorie Werkausgabe, Suhrkamp Verlag, S. 14.

注11　Best, D. "Art and Sport," *op. cit.*, p. 78.

注12　Cordner, C. "Differences Between Sport and Art," *Journal of the Philosophy of Sport*, vol. 15, 1988, p. 37.

注13　Thompson, J. B. *Ideology and Modern Culture : Critical Social Theory in the Era of Mass Communication*, California : Stanford University Press, 1990, p. 126.

注14　馬場修一「文化と社会―現代文化論にむけての予備的考察―」『講座哲学3人間の哲学』東京大学出版会、一九七三年、二〇九―二一〇頁。

注15　丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店、一九八一年、三一二頁。

注16　同書、二一〇頁。

注17　Leder, D. *The Absent Body*, Chicago and London : The University of Chicago Press, 1990, p. 8.

注18　Arnold, P. J. *Meaning in Movement, Sport and Physical Education*, London : Heinemann, 1979, p. 121.

注19　ベッカー（久野昭訳）『美のはかなさと芸術家の冒険性』理想社一九六四年。なお、このポイントに関する詳論は、拙著『スポーツの美学』参照。

注20　木田元「身体・感覚・精神」『新岩波講座哲学9　身体　感覚　精神』岩波書店、一九八六年、二五頁。

注21　Schiller, F. *Über das Schöne und die Kunst : Schriften zur Ästhetik*, München : Deutscher Taschenbuch Verlag, S. 181.

注22　*Ibid.*, S. 182−183.

注23　「質料的な意味での遊戯」とか「自然的遊戯」(Schiller, *Ibid.*, S. 224) などという語義の一貫性を崩す用語法がシラーにはある。

注24　渡辺護『芸術学』東京大学出版会、一九七五年、一九六頁。

注25　西村清和『遊びの現象学』勁草書房、一九八九年、三三五頁。

注26　橋本博「「美的判断力批判」に於ける「遊び」の概念」『上武大学論集』第一八号、一九八六年、一一七－一三六頁。

注27　Heidemann, I. *Der Begriff des Spieles und das ästhetische Weltbild in das Philosophie der Gegenwart*, Walter de Gruyter & Co., 1968, S. 8－10.

注28　Derrida, J. trans. by Spivak, G. C. *Of Grammatology*, Baltimore : The Johns Hopkins University Press, 1974, p. 71.（足立和浩訳『根源の彼方に―グラマトロジーについて（上）』現代思潮社、一四三－一四四頁。）

注29　Heidemann, *op. cit.*, S. 9.

（ひぐち・さとし　広島大学教育学部）